

聖霊降臨後第11主日 ルカ12章13―21節

〔新共同訳〕

13 群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」
14 イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」
15 そして、一同に言われた。「どんな食欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」
16 それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17 金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、18 やがて言った。『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、19 こう自分に言ってやるのだ。』さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ」と。
20 しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。
21 自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

〔直訳〕

13 だが言った ある人が 群衆から 彼に、
「先生、あなたは言うてください 私の兄弟に
分配することを 私と一緒に 遺産を」。

14 だが彼は 言った 彼に、
「人よ、誰が 私を 任命した
審判者に あるいは 分配者に あなたがたの上に」。

15 だが彼は言った 彼らに対して、
「あなたがたは見なさい そして あなたがたは警戒しなさい
すべての食欲から、
というのはいない
余っていることにおいて ある人にとって
彼のいのちが ある 彼に属している物から」。

16 だが彼は言った たとえを 彼らに対して 言いながら、
「ある豊かな人の 豊作であった 土地が。

17 そして 彼は思案していた 自分の中で 言いながら、
『何を 私はいすべきだろう、
というのはいない 私は持つ
どこに 私は集めるだろう 私の実を』。

18 そして 彼は言った、
『このことを 私はいすだろう、
私は壊すだろう 私の倉を』。

そして より大きいものを 私^は建てるだろう
そして 私^は集めるだろう そこに すべての麦を
そして 私^の良い物を

19 そして 私^は言うだろう 私^の魂に、
「魂よ、 おまえは持っている

多くの良い物を 置かれた物を 多くの年のために。

おまえは休みなさい、 おまえは食みなさい、

おまえは飲みなさい、 おまえは喜びなさい』。

20 だが言った 彼に 神は、

『愚かな者よ、 この夜 あなたの魂を 彼らは取り戻す あなたから。

だがところのものは あなたが準備した、

誰のために あるだろうか』。

21 このように 蓄える者は 自分のために

そして ない 神のために 豊かである者は」。

①いのちと財産（13―15節）

① 12章1節では「数えきれないほどの群衆」が集まり、イエスが語り始める。13節の「ある人」には「群衆からの」という説明があり、この句によって1節の「群衆」と結びつけられている。群衆の中の名もない「ある人」がイエスの話を遮るといふ形で物語は進められる。彼はイエスを「先生」と呼ぶ。「先生（ディダスカロス）」は「ラビ」の訳語であり、ユダヤ教の「教師」を意味する。遺産に関する問題はモーセ五書で取り扱われている（申二一15、民二七1―11、三六7―9など）。そのため、遺産に関するもめごとがあれば、宗教的指導者や律法学者に相談したのだろう。

② 「分配することを 私と一緒に 遺産を」。「分配する」と訳した動詞の形は、「各自がその分け前を持つ」という意味合いを持つので、「私と分ける」と訳すことができる。「分配することをお前は言ってください」とつながる。ここでは「言ってください」は「命じてください」の意味であり、そこで、「分配しなければならぬ」の意味を持つようになる。

③ 「誰が 私を 任命した 審判者に あるいは 分配者に あなたがたの上に」。この修辭的疑問文は、「誰も任命していない」という答えを示唆する。イエスは相続問題を調停するラビのような立場にはない。この後に語られるたとえが示すように、イエスは律法学者とは異なる解決を下す。「分配者」と訳した語メリステースは、「調停人・仲裁者」の意味でも使われる。「上」は前置詞エピソードであり、ここでは「あなたがたの上に力が及ぶ（審判者あるいは分配者）」という概念を表している。

④ 直訳の15節後半の解釈にはいくつかの可能性がある。

① この箇所は、二つの構文、

ある人にとっていのちは余っていることにおいてではない

ある人にとっていのちは彼に属している物からではない

が組み合わされたとする見方がある。この場合、「余っていること」と「彼に属している物（彼の持ち物）」とが互いを補足する関係にあるとすれば、「人のいのちは、有り余るほどある彼の持ち物によるのではない」と訳される。

①新共同訳は、5行目は譲歩を表す句とし、4行目の否定詞「ない」を6行目「ある」にかかるとして、「有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることもできないからである」と訳す。⑦と⑧は「人のいのちは、持ち物によらない」と訳す点で解釈は同じである。

⑨しかし、「ない」を「余っていることにおいて」につなげ、「余っていることにおいてではなく、人のいのちは持ち物からである」と読むこともできる。「から」と訳した前置詞エクは起源や出所を表す。従って、「人のいのちは持ち物との関わり方によって決まるが、それは有り余っているときではない」という意味になる。

⑥「彼に属している物」という表現はルカ文書にしか見られない。ルカ8章3節は「多くの婦人たちも一緒であった。彼女たちは、自分の持ち物を出し合って、一行に奉仕していた」と述べ、使4章32節でも持ち物の共有という文脈にこの表現が使われている。そうであれば、この箇所でも、「有り余るほど持つのではない持ち物との関係」が語られているのであり、それは物を「施す」、あるいは「共有する」という態度を示していると言えるだろう。

②いのちを支えるもの（16―21節）

①イエスは遺産相続の調停を断り、真の豊かさがどこにあるのかを、たとえを用いて語る。「たとえ」と訳される語、パラボレーは、元々は「脇におくこと・併置」の意味から「比較」を意味し、転義して「型・象徴」「たとえ」の意味をもつ。ヘブライ人への手紙（九9、一一19）で2回使われている他は、すべて共観福音書で用いられている。福音書ではとくに、実生活に即したわかりやすい話を用いて教えを伝えるというイエスに特徴的な説教の方法として使われる。聖像など感覚に訴える事物で神をあらわすことが禁じられていた（出二〇4）ことから、旧約聖書でもしばしば地上の身近なたとえを用いて象徴的に神を表現する方法がとられている。イエスはそれをさらに発展させ、神の国という神の啓示による世界、さらに倫理的教訓を示すためにたとえを用い、それによって教えを分かりやすく、心に深く残るものとしている。

②豊かな人は、土地が大豊作に恵まれたとき、「私の実を集める」場所を思案する。15節で「有り余るほど持つのではない持ち物との関係（＝施す・共有）」が語られているとすれば、「集める」という物への態度は、イエスが教える態度とは全く逆のものである。しかも、ここでは「私の実」と述べられている。これは、「私の畑の実り」を意味することも読めるが、作物の実りが「私の物」であると理解されているとも読める。豊かな人は、「私の実りを、私が集めるために、私は何をすべきか」と思案している。彼にとって重要なことは、実りを「私の物」とすることである。

③17節の「彼は思案していた」は継続を表す形であるが、18節の「彼は言った」は一回的な行為を表す形で書かれている。この二つの動詞を「彼は思案していた……そして彼は言った」とつなぐことによって、豊かな人は「思案を続けていたが、ついに思案を終えて決断に達した」という経過を表現している。彼は「このことを 私はなすだろう」と決断する。「このこと」は文頭に置かれて強調されている。彼がなそうと決めたのは、「私の倉を私は壊し、より大きいものを私

は建て、そこにすべての麦と私の良い物を私は集める」ことである。

④「良い物」は形容詞アガソスの中性複数形である。中性形は「善・善いこと」(ロマ二10)、「益」(ロマ八28)、「動産」を表すのに用いられる。新共同訳はこれを「財産」と訳すが、「食糧」と訳すものもある。その場合、16節の「土地」の産物の意味にとっているのだろう。「財産」と訳すと、ただ農夫だけでなく、それ以外の者にもこのたとえが向けられ、一般化される。

⑤19節「そして 私は言うだろう 私の魂に」。「魂」は名詞プシューケーである。2行目の「魂よ」という呼びかけにもこの語は使われている。ここではプシューケーが次の二つの意味で使われている。

⑦再帰代名詞の「私自身」を躍動的に表すセム語の用法に従っている。

⑧一部で全体を表す代喩として使われている。「魂よ」と自己の一部に語りかけることによって、自己全体への語りかけを表す(詩一〇三1・2・22)。

ここでの「魂」は「人間の精神的な活動をつかさどるもの」という意味ではなく、背景にはヘブライ語の「ネフェシユ(魂)」がある。ネフェシユは元来「口・のど」を表す。この「魂」で表されるのは、自分の中にある飢えや渴きを、食物の摂取や作物の収穫によって補おうとする人間の姿である。

⑨「多くの良い物を 置かれた物を 多くの年のために」。18節では「私の良い物」と述べられたが、ここでは「多くの良い物」となる。この後にさらに「多くの年のために」と続くことから考え、豊かな人の関心は集められた物の量とそれによる将来の保証に置かれているのが分かる。

⑩「おまえは休みなさい、おまえは食べなさい、おまえは飲みなさい、おまえは喜びなさい」。「飲む、食べる、楽しむ」の組み合わせは、コヘレト八15、トビト七10、シラ一19にも見られる。これらの行動は、気苦勞のない贅沢な生活を表し、放蕩を表すことさえある。「喜ぶ」は、「楽しむ・陽気になる」の意味も表す。ルカでは特に祝宴に列することと結び付けられ、「浮かれる」の意味で用いられる。

⑪17-19節の豊かな人の言葉をギリシア語原文で見ると、ここに現れる動詞はすべて一人称単数形であり、「私」が主語である。さらに、「私の」という一人称の所有代名詞が四回も用いられており、豊かな人の関心が常に自分自身に向けられていることの証しとなっている。この豊かな人の関心は「私」にあり、他者に向けられることがない。彼は自分の力によって「命」を獲得しようとし、獲得した「命」は自分のためだけに使おうとしている。20節で神は、このような「豊かな人」を「愚かな者」と呼ぶ。それは彼が蓄えた財産を死によって没収されることを知らずに、安楽な将来を夢見て有頂天になっているからである。

⑫20節「あなたの魂」。19節に2回使われたプシューケーが、ここにも現れる。ここでは19節とは異なり、「私自身」の意味ではなく、「生命」を意味する。人間に与えられ、人間から取り去られねばならない「生命」を表している。このように両義的に用いられているのは、意図的である。「彼らは取り戻す」は、神の行為を表す婉曲的に表す神的受動態の代わりと見られている。しかし、ここでは語り手が神であるので、死の使いを表すという見方もある。「取り戻す」と訳した動詞は「求め返す・返すことを要求する」を意味する。この動詞によって、生命は借りものであるに神に返さねばならないという捉え方が示される(知一五8「借りていた魂の返済を求められ

る)。

① 21節「このように」は省略語法。意味は「これが(…の者が)置かれた状況である」。「このように蓄える者は 自分のために そして ない 神のために 豊かである者は」。自分のために蓄えるので、他人(貧しい者・やもめ・孤児・寄留者)のためには用いない。この主題は、「自分の持ち物売り払って施しなさい。擦り切れることのない財布を作り、尽きることのない富を天に積みなさい」(33節)によって、さらに展開される。「神のために豊かでない者」は、「神の目から見て、富とされるものを蓄えない者」を意味する。この豊かな人は自分のために宝を集めるが、神の目には豊かになっていないので、結局は自分のために豊かになってはいない。

③ コヘレトの言葉 1章12―14節、2章18―23節

④ 「コヘレト」というヘブライ語は動詞カーハル(集まる・集会を開く)から派生した名詞である。

七十人訳はこの語を「集会で語る者・伝道者」と訳しており、そこから「伝道の書」という書名が使われてきた。この書の本文ではコヘレトは著者名として用いられ、表題によればダビデの子孫でエルサレムの王とされているが、内容から考え、これは文学的な虚構と見られている。

⑤ この書の著作年代や場所、著者についてははっきりしていない。紀元前3世紀の後半に、アレキサンドリア、あるいはパレスチナの地で、知恵についての伝統的な見方に納得できない人の手によって書かれたと推定する者が多い。いずれにしても、ユダヤ教では、この書を正典とするかどうかをめぐる大論争となった問題の書であるのは確かである。

⑥ 「空しい」という語(ヘヴェル)は、もともとは「蒸気・もや」や「息」を意味し、そこから「蒸気のようにはなく、もろく、無価値で、虚しいもの」を意味する言葉となった。旧約聖書全体では73回使われているが、そのうち31回は「コヘレトの言葉」での用例である。有名な1章2節を直訳すると

「空しさらの空しさ」 コヘレトは言った 「空しさらの空しさ すべては空しい」

となる。「単数形+同じ語の複数形」という言い回しは最高のもをを表す。「空しさらの空しさ」といえば、「この上ない空しさ」のことである。

⑦ 「コヘレトの言葉」は「知恵の書」や「箴言」などと共に知恵文学に分類されるが、他の知恵文学とは違って、「空しさ」を繰り返す書である。この書は伝統的な見方に疑問を投げかける点で「ヨブ記」と似ているが、「ヨブ記」が最後には二度にわたる神の顕現を述べ、希望への光明のうちに終わっているのに対して、「コヘレトの言葉」は12章8節の

「空しさらの空しさ」 コヘレトは言った 「すべては空しい」

で終わっている(一一九―14は後の付加だとされている)。

このようにコヘレトは最初から最後まで「空しさ」を訴えているが、それは他の知恵文学の説く秩序を認めることができないからである。普通、知恵文学は「善人は栄え、悪人は滅びる」という原理に立って、知恵を求めることの大事さを説く。しかしコヘレトは、この原理の正しさを真っ向から否定する現実がそこにあるのではないかと主張する。

⑧ コヘレトは万物の創造者としての神を信じているが、人間の良い行いが良い結果を生み出し、悪

い行いは悪い結果を呼ぶといった必然的な関連性(秩序)を認めることができない。むしろ、「裁きの座に悪が、正義の座に悪がある」の見過ごしにすることができず、「正義を行う人も悪人も神は裁く」としか言いようがない(三16―17)。しかも現実には「身分の高い者が、身分の高い者をかばい、さらに身分の高い者が両者をかばう」のであり、「不正な裁きや、正義の欠如がこの国にあるのを見ても驚くな」と戒めざるをえない(五7―8)。彼の目には、神は勝手気ままに振る舞う、移り気な存在である。したがって、神との人格的な交わりも不可能であり、神に祈っても無意味だと考え、「太陽の下、人間にとって、飲み食いし、楽しむ以上の幸福はない」(八15)と結論づける。

① 1章14節に「見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであつた」とある。ここでは「蒸気・もや・息」を表すヘブエルによって、「蒸気のように消えてゆき、とめどない空しさ」が表され、さらに空気の移動を表す「ルーアツハ(風)」が共に用いられている。「風を追う」は徒勞となる意味のない行為を表し、コヘレトは随所に用いている(二11・17・26、四4・6、六9)。1章12節から2章26節は一つの段落であるが、その最初の小段落で(二12―18)、コヘレトは「知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す」と述べ、知恵の探求の空しさが「風を追う」という表現で表されている。

⑧ コヘレトは、知恵の次に快樂を追求したが、それもまた空しいものであつたと語る(二1―11)。さらにコヘレトは、知恵は愚かさにはまざるが、賢者も愚者も共に死を免れないとして、より賢くなることは空しいとする(二12―17)。そして、「知恵と知識と才能を尽くして労苦した結果を、まったく労苦しなかつた者に遺産として与えなければならぬ」ことを「空しく大いに不幸なこと」と嘆く。自分の労苦を愚者が受け継ぐかもしれず、そのことの空しさを語っている(二18―23)。そこで、コヘレトは「飲み食いし、自分の労苦によって魂を満足させること」を最良のこととする(二24)。労苦の末、コヘレトが得た結論は、死を免れない人間は「今、自分の労苦によつて得た物を自分で楽しめ」ということである。

④ 他者と共に生きる

④a 自分が労苦した結果は誰かに受け継がれるが、その者が賢者であるか愚者であるかを知ることができない。コヘレトは、将来を自分の努力によつて確かにすることのできない空しさを嘆いている。人間は死を免れないという空しさがコヘレトの苦悩の根源にある。他者を信頼できず、今ある命を超える「いのち」を知らないコヘレトは、死という限界を見つめながら「今を楽しむ」。

④b 人間の命は空しい。だからこそ、イエスが語るたとえに登場する「豊かな人」は、自分の力でそれを少しでも長く保とうとする。彼は「私の良い物」を集め、それによつて自分の「いのち」を守ることもできると喜ぶ。土地の収穫をすべて「私の」ものとして蓄える彼もまた、他者を信じることのできない人間の一人である。豊かさを自分のためだけに用いる生き方は、神から厳しく非難される。

④c イエスは「富んでいるあなたがたは不幸である」(ルカ六24)と教える。富によつてすでに慰めを受けている者は、神からの慰めを知ることがないからである。富は容易に人を神から引き離すものとなる。富を「私のもの」として集めるのではなく、その富を「貧しい者のために」用いるとき、人は神が与える「いのち」を生きたることができる。